



2013年 4月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 54

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 46 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 昼からはちと影もあり雲の峰 小林一茶

この句には蛭・蚊・蜂・蜥蜴・蟻・蜘蛛・蚤と七種の 小さな生き物が隠されているという。流石、一茶ならではの言葉遊びの名句と言わざるを得ません。啓蟄も過ぎ、温かくなつたと喜んでいたら、杉に限らず、あらゆる草木から花粉が、例年以上に煙の様に舞い上がる。おまけに汚染物質の混じった黄砂。ひどい花粉症の者には、喜びどころか「春の憂鬱」の始まりです。会長は、花粉症の辛さをお知りでないとか……。本当に羨ましいですね。

会長 > 「杉たるは鼻に及ばず」というところですね。まあ今、流行ですから、自分が花粉症でないと時代から取り残されたような気分です。

高橋 > ふふ！面白い地口！でも、贅沢なお悩みですね。代わって差し上げたいところですが、ところが、敵も然るもので、この花粉症、ある年、ある日、目と鼻がムズムズして、会長もお仲間入りと言うことにもなりかねません。ご健康にはくれぐれもお気を付けになってご活躍下さいね。

会長 > 一茶の「折り句」は面白いですね。私もひとつ、安部ノミクスを使ってつくりましたよ。「春愁安部蚤屑も憂鬱で」。いや冗談です。小林一茶に対抗して何か考えますか。

「南風や森のしらみに向かでゆく」(蠅守宮の虱百足ゆく)。いかがでしょうか。南風「蠅」・や森「守宮」・しらみ「虱」、向かで「百足」ですね。

高橋 > すごい！流石、地口の名人！でも一茶は七種、会長は、えーと…四種、あと一歩です！ふふふ！

会長 > おっと、そういえば、八木健が以前に作った「切れ字」十八種を歌にした「蚊帳へつりけり烏賊にもがな濡れずぞ世辞知らんかな」というのがあります。漁師が烏賊を釣ってきた。蠅がたかるので蚊帳の中に吊る。その仕事を妻がするのだが濡れるのを防ぐために拭くのです。しかし純朴な妻はお世辞ひとつ言えない、という意味です。

高橋 > 参りました。初めから盛り上がって面白いですね。では、そろそろ本題に戻ります。本日は紅緑編「滑稽俳句集」の「冬人事」の部、前回に引き続き、季語は「節気候」の部からです。ご解説よろしくお願い致します。

節季候や臼こかし来て間がぬける 鬼貫

節季候の張合ぬかす明家かな 桃後

節季候や面つつまれぬ小風呂敷 蕪村

節季候来り裏白表白 蕪村

会長 > 「節季候や臼こかし…」、節季候は「せきぞろ」と読む。とくに元禄時代に盛んに行われた一種の物乞(ご)いのこと。歳末になると、男女が編笠(あみがさ)に齒朶(した)の葉をつけてかぶり、赤い布で顔を隠して目だけ出し、箆(ささら)をすりながら、家々を回ったのです。臼をどこかで貰ってきたのですが、「物乞い」のアピールのタイミングが悪くなってしまったのですね。今で言うなら、自転車を引っ張りながら「明けましておめでとう」と、言うようなものですから。

「節季候の張合ぬかす…」、節季候が威勢よく訪れたのが空家で、張り合いが抜けた。

「節季候や面つつまれぬ…」、顔を包みきれなくて、小風呂敷からはみ出すと言わけてですね。

「節季候来り…」、句では「おもてじろ」と読ませて裏白にかけたものですが、本来は表白(ひょうびやく)と読みます。寺院での儀式で、僧侶が今から執り行う儀式の開催趣旨等を述べたものです。

高橋 > なるほど、節季候は「せきぞろ」と読み、二～三人一組で初春の祝言を述べて、踊りながら米錢を乞い歩いた人達のことなのですね。芭蕉も「節氣候の来れば風雅も師走哉」などと、句に詠んでいますね。次の季語は、「古曆」と「煤拂」です。

御經に似てゆかしさよ古曆 蕪村

煤拂に鼻のかけたる佛かな 米巒

煤拂鼠の先へいたちかな 移竹

天井の天女の煤も払ひけり 鳴雪

いさかふて妻休みけり煤拂 紅縁

会長 > 「御經に似てゆかし…」、經文と同じように毎日いくたびも手にしたり、眺めたりして馴染んだ古曆に愛着を感じているのですね。

「煤拂に鼻のかけ…」、これは煤拂いで仏像の鼻を壊してしまったのですね。金属製ではなく、焼き物だったのでしょうか。

「煤拂鼠の先へ…」、煤拂いに驚いた鼠が飛び出した。そこへ鼠を捕って食べるいたちが、鼠の前に飛び出した。驚くような風景。

「天井の天女の煤…」、天井に描かれた「天井画」ですね。普段は畏れ多くて触れたり出来ません。天女は美人ですから、触れてみたい。煤拂いなら堂々と…。

「いさかふて妻休み…」、煤拂いしていて夫婦喧嘩になったのですね。あんた勝手にしんさい、と。

高橋 > 流石に「天女の煤払い」の気持ちよくお分かりですね。ふふふ！夫婦喧嘩の妻の台詞も…。次の季語は、「餅搗」ですよ。

餅春や月の兎に覗かる 柳居

餅搗が隣へ来たといふ子かな 一茶

爺がついて婆がまるめる餅哉 瀾水

かはりあひて先生の餅をつきにけり 虚子

会長 > 「餅春や月の兎・・・」、うーむ、「餅春」が季語だとしたら、初めて見るのですが、春の餅つきなんでしょうね。鶯餅なんかつくる。月の兎がお株を奪われたんで、なんだこりゃと覗くわけですね。

「餅搗が隣へ来た・・・」、餅つきをして家々を回ったのですね。費用もかかることだから、どの家もというわけにはいきません。隣へ来た・・・、なるほどね。うちは貧乏だから駄目だと。

「爺がついて婆が・・・」、老夫婦の息の合ったところですね。

「かはりあひて先生・・・」、弟子が先生のお宅で餅つきのサービス。特定の弟子ではなく、全員が力を合わせてやるわけです。

高橋 > 今では、めったに見られなくなった餅搗の様子が詠まれていて楽しいですね。次の季語は、「掛乞」です。

掛乞の曰く主人の曰くかな 子規

掛乞のいさかふ米屋薪屋かな 椽面坊

掛乞のいにしかと見る小窓哉 寒樓

掛乞を夜具の袖から覗きけり 紅縁

ご解説よろしく願いいたします。

会長 > 「掛乞の曰く主人・・・」、掛け取りと、受けて立つ主人のやりとりは、傍で見ている

分には面白かったのでしょうか。

「掛乞のいさかふ米屋・・・」、掛け乞が鉢合わせして、どちらが先だとやりあっている。

「掛乞のいにしかと・・・」、「いにしか」は、去ったかということです。居留守をつかったのです。

「掛乞を夜具の袖・・・」、寝ているからと掛乞を追い返したのですね。その後ろ姿を夜具の袖から覗く。昔は「かいまき」という寝具がありましたね。

高橋 > 晦日の「お掛取りさま」をいかに躲したか、今でも落語や小話で面白く語られていますが、やはり俳句でも昔の庶民の暮らしの様子が手に取るようにわかって楽しいですね。次の季語は「年の市」と「年忘」と「年守」です。これで、あとは「冬詠物」の部が終われば、紅線編「滑稽俳句集」の句、全てが終了となります。面白いご解説も、あと少しになりましたが、最後までよろしくお願い致します。

皮羽織見せに出るなり年の市 一茶

わんといへさあいへ犬も年忘 一茶

忘れけり四十九年の年忘れ 鳴雪

年守や乾鮭の太刀鱈の棒 蕪村

会長 > 「皮羽織見せに出る・・・」、皮羽織は鹿の皮でできたもので風を通さないから温かい。年の市へ見せに出るというのは、自慢しに行くということで、それほど値打ちのあったものなのです。

「わんといへさあいへ・・・」、犬も一茶にとっては、友達みたいなものですから、「ワン」と吠えてごらんなさいと、からかっているわけですね。

「忘れけり四十九年・・・」、四十九歳の鳴雪が年忘れの行事を洒落ている。

「年守や乾鮭の太刀・・・」、鮭の干したのと、棒鱈は今でも正月から冬場のお馴染みですね。それは年の市で手に入れる定番ですよという句です。

高橋 > 今までお忙しい中、いろいろご無理を申して何かと大変でいらしたと思います。でも、「紅緑の滑稽俳句集」も終わりに近づくと、この古の句集と何か離れ難い淋しい気持もして来るから不思議ですね。残念ながら、本日もお時間となってしまいました。次回は、最後の部「冬詠物」からということで。それでは、ご好評の虎造で、今日のインタビューを終わらせて戴きたいと思います。

会長 > はいはい！それでは、本日も虎造節のひと節を！

♪紅緑やああ 滑稽俳句詠みこなすうううう
滑稽句集に旅をして 振り返れば
時々のおおお 難解な句に苦しみつ
読解の旅の行路苦とおおお
思いもせずにたどりつくうう
この喜びの思いの甘くうう 砂糖を舐める
ごとくあり 砂糖行路苦と言うべきかああああ
佐藤紅緑先生のおおお お蔭で出来た暇つぶし
はらが減ったら「櫃まぶし」いいい♪